

(VI)

六年ぶりに東京から帰って来た木下は、スベテを否定するのか、宵のうちから酒のある対話を始めた。酒につられてなのか(注=九州派の連中は殆ど呑まなかった)または彼の明快な論理にひかれてなのか、学生、詩人等が、木下との珍妙な問答で夜を明かした。お客さま同士の議論は激しくなるのに、木下の方へ一度それが交わされると、一瞬にして沈没させられてしまう不思議さ—ただ一言なのだ。どんな難問でも「それでいいんだ」ですんでしまうのだ。なんと簡単に消化してしまうオートメ化の問答器なのだろう。これこそが日本の禅のオートメの可能性かも知れない。だがスッポリその神聖な対話者達をオブジェと化さしめていた田部の室は、いったい、何といたらよいのだろうか。ベニヤで作られた二間四方の室で、全体が真白だ。壁はへこんでいる。正確にいうと内側の壁はへこんでいる。何故ならプラスチックで出来たマネキンを縦に切って人形の内側が全部、内部の壁となっているからだ。勿論、壁同様に真白に塗ってある。その足にはストッキング(絹の長靴下)まで丁寧にはかせているのだ。この室で、連中は酒をのみながら議論しているわけだが、誰か一人は、必ず連続して、別に用意されたマネキンの顔や頭にクギを打ち続けなければならぬという、神聖な仕事を命令されるのだ。それが、この室を使用させて貰う唯一の条件だが、その条件に価する欲望が、その室にあったのだろうか。何故なら朝まで彼等はそこにいたから。